

主の晩餐：ルター派の聖餐理解と実践

正木牧人

序

福音主義神学誌で福音主義諸教会の聖餐論を取り上げるのには、東部部会と西部部会の今春の研究会で本年聖餐論を取り上げたことに由来する。筆者は西部部会で社会学的、宣教学的な聖餐理解と今日の日本の教会への適応の提案を発表された三好明久氏論文への応答者の一人として発表を任じられた。その興味深い方法論と適応例をこれまでの教理的理解との相違を根拠に急いで一喝するのではなく、むしろ教理的な信仰告白に堅く立った上で日本の教会の教会形成の文脈の中で聖餐の真の意味の理解が進み、聖餐にあずかる喜びを取り戻す機会とできないかを考察した。

本稿では部会研究会の内容を繰り返したり、深めたりするのではなく、むしろ聖餐論一般についてルター派の立場から論ずるようにとの指示を受けている。しかしその取り扱いについては各執筆者に一任されている。そこで「ルターの小教理問答」の枠組みに沿いながら、聖壇の礼典、主の食卓などの名前でも呼ばれている聖餐について、おおまかな理解と実践を紹介していくことにしたい。

ルターの小教理問答は、信仰教育の教材である。これまでルター派教会で長く広く用いられてきた。マルティン・ルターは早くから教会で二週間連続の入門説教を年に四回繰り返して行い、親たちが子どもを出席させるように求めている。また小さなパンフレットを用意して教材として用いていた。しかし、1528

¹ マルティン・ルター、小教理問答：一般の牧師、説教者のためのマルティン・ルター博士の手引き、「一致信条書」聖文舎、1982年、479-523頁

年と29年にザクセンやその他の地方の教会巡察を行った際、主の祈りや使徒信条をやっと言える程度の牧師たち、全く信仰教育のなされていない無知な信徒たち、何年も聖餐が行われていないなどの働き人と信徒の信仰の実態を目の当たりにして、ルターはこのような教会の危機的な実情を踏まえた小教理問答を著したのである。まず、十戒、信条、主の祈り、食前と食後の祈り、朝夕の祈り、洗礼、聖餐という、七枚のポスターのかたちで発表し、さらに序言と義務表を前後に加えて1529年5月に初版小冊子を出版した。

ルターの小教理問答は、問答形式で書かれており、聖書のおしえとその実践が非常に簡潔に教えられている。「聖壇の礼典」とされる聖餐の項目は、五対の質問と答えによって構成されている。まず「聖壇の礼典とは何ですか」という問いによって聖餐の定義を明らかにし、「それはどこにしているさるさるか」という問いで聖書の根拠を述べる。更に、「このような飲食が、どんな役に立ちますか」、「肉体的な飲食が、いかにしてそのような大きなことをすることができ、」の設定の御旨を学び、最後に「どのような人が、この聖礼典にあずかるにふさわしいのですか」という問いで聖餐にあずかる実践面が教えられる。

小教理問答は子どもが学ぶことのできるように牧師や両親が用いる教材として書かれているが、その内容は平易でありながら決して初歩的な教えにとどまっているのではなく、むしろルター派の聖餐についての教えが、この小教理問答にすべて述べられていると言える。ここではこの五つの問いと答えの枠組みを用いて、議論を深めていきたい。

第一：聖壇の礼典とは何ですか。

問い：聖壇の礼典とは何ですか。

答え：それは、われわれの主イエス・キリストの、まことの肉、まことの血であって、われわれキリスト者が、パンとぶどう酒と共に食し、飲むようにと、キリストご自身によって設定されたものです。

以上がルターの小教理問答において、聖餐の第一の問答である。聖餐がキリストのまことの肉、まことの血であること、また、キリスト者がパンとぶどう酒と共に食し飲むこと、それはキリストが設定されたこと、という内容である。

聖餐がキリストのまことの肉、まことの血であるという信仰告白は、歴史的に非常に重要な理解である。ルターはもともと別の教会をつくるつもりはなかった。聖餐論を語るときも、それは戦いのためではなく、聖書の御言葉に基づく真の一致した交わりのためのことであつた。ローマ・カトリック教会で聖餐が誤用されてきた歴史があつても、だからといって聖餐が失われていたというのではない。のちに改革派教会からルーテル教会にはローマ・カトリック教会の影響が残っているという批判を招いても、聖餐論は聖書を土台にして語ることに終始している。

1530年にカール五世の前で告白されたアウグスブルク信仰告白の第十条には「キリストのからだとは、主の晩餐において、真に現在し、それを食する人々に分与される。そしてわれわれ諸教会は、これと異なることを教える人々を是認しない」と記されている。しかし、これをフィリップ・メランヒトンが1540年に「主の晩餐において食する人々にパンとぶどう酒と共にキリストのかからだとは血は真実に示される (exhibeantur)」と変更し、これにはカルヴァンも署名している。ルーテル教会は1540年版を「改訂されたアウグスブルク信仰告白 (Confessio Augustana Variata)」と呼び、「改訂されないアウグスブルク信仰告白 (Unaltered Augsburg Confession)」を自身の信仰告白として採用してきた。

聖餐において、キリスト者はキリストのまことのからだとまことの血をいただく。キリストの聖餐の設定辞の約束のまま、パンとぶどう酒においてまことの血、まことのからだをいただくという約束に立つ。この点で教皇派、すなわちローマ・カトリック教会と、聖餐形式論者、すなわち改訂されたアウグスブルク信仰告白の名の下に教会に入り込んできている者などの立場を両者とも明確に斥ける。ローマ・カトリック教会は聖餐はキリストのからだとは血であるというがそれはもはやパンとぶどう酒ではないとし、聖餐形式論者は聖餐のパンとぶどう酒がキリストのからだとは血そのものではなくそれをあらわすもの、保証するものとする。そうではなく、聖餐において私たちがパンとぶどう酒をいただくとき、それは設定辞の御言葉によってキリストのまことのからだとは血をい

ただいているのである。一致信条書の中で、ローマ・カトリック教会の三つの誤謬、聖餐形式論者の十四の誤謬が斥けられ非難されている。

ローマ・カトリック教会の聖餐論について、大きくわけて、聖餐の実質変化の教理、生者と死者のための犠牲のミサというような聖餐の誤用、そして第三に、信徒にパンのみを与える一種陪餐に反論する²。ここでルーテル教会は化体説と呼ばれる聖餐の実質変化の教えを退けていることに注目したい。化体説は、聖餐において聖別されたパンとぶどう酒はキリストのからだと血の実質に変えられる、とする立場である。パンとぶどう酒は、その実質と本質を失い、トマス・アクィナスの言葉では「偶有性 (accident)」のみを残すという教えである³。ローマ・カトリック教会では聖餐のパンはパンというものの形のもとにはあるがそれはもはやパンではなく、聖なるキリストのからだなのである。すなわち、聖別後にパンとぶどう酒の実質が残るとする立場は斥けられている。聖別後はキリストのからだなのであるから、聖餐の行為以外のときにも保管したり、見せたり、拝したりしていた。ローマ・カトリック教会の対抗改革の会議であるトリエント公会議における聖餐に関するセッション (1551 年セッション三) では「キリストのからだと血はパンとぶどう酒の外見(sub speciebus)のもとに聖餐に封じ込められている」と第四ラテラン公会議 (1215 年) の決定を再確認した。ルターーの理解では、たしかに聖餐のパンはキリストのからだであるが、キリストのからだに「成る」のではない。

また、ルターはローマ・カトリック教会の聖餐を犠牲とする理解をも斥けている。ここでは、聖餐はキリストのなだめの犠牲とされる。父なる神と私たちの和解のためにご自身を血を流した犠牲として一度おささげになった同じキリストが、司祭によって聖壇の上で毎日みえるかたちで無血の犠牲としてささげられるという。ここで聖餐をささげるのは厳密には司祭ではなくキリストご自身である。聖餐の犠牲は十字架上的の犠牲とはあり方は違うが、それを現在のものとして表示する (repraesentatur) ものであり、これによって救いの力が適応されるという。トリエント公会議のカテキズム (Catechismus

² 和協信条根本宣言第七条 107 以下

³ トマス・アクィナス「神学大全」III、質問 75、4-5 項

Romanus, 1566) によると、無血の犠牲は十字架の犠牲と同一のものであり、人々はそれによって十字架の犠牲の実を受け取る、とされる。ルターはこのような犠牲の聖餐論を受け入れない。

聖餐形式論者に対してはどうであろうか。聖餐形式論者には様々な立場のものが含まれる。聖餐を外的なものに過ぎないと考える者、聖餐にキリストが真に現在すると告白するが神性によってだけのことと考える者、至る所にあるキリストの霊が地上の我々を天にあるキリストのからだと霊的に信仰によって結合すると理解する者などである。様々な立場ではあるが彼らに共通しているのは、聖別されたパンとぶどう酒をキリストのからだと血とは信じていない、という点である。彼らの中にはアウグスブルク信仰告白に近い言葉遣いを用いようと努めて、聖餐においてキリストのからだと血が真実に信仰者によって受け取られる、と告白する者もいる。しかしそのキリストの真のからだと血は、天が地から離れているように聖別されたパンとぶどう酒からはるか遠くに離れているとも告白する。つまり、キリストのからだの現在を、この地上のことではなく信仰に関することと理解する。これはキリストご自身による聖餐の設定辞を、語られたとおりの意味で率直に受け取るのではなく、転輸、もしくは象徴的解釈によって、別の、新しい、異なった理解へと導くものであり、多種多様な告白にわかれていたが、ルターはそれらすべてを斥ける。

カルヴァンが、共在説のルターと象徴説のツヴィングリの中間の立場を取る調停者とされることが多いが、ルーテル教会においてはローマ・カトリック教会と聖餐形式論者が両側の極端とされ、どちらのめざにも落ち込まないように警戒する。このとき、リアル・プレゼンスという言葉で欺かれなないように注意が必要である。キリストが聖餐に現在する、というリアル・プレゼンスという言葉は、たとえば 1541 年のレーゲンスブルク宗会議ではローマ・カトリック教会、ルーテル教会、聖餐形式論者の三者とも、この言葉をもって自説を展開できた。それぞれの立場がリアル・プレゼンスという言葉に託する意味合いが違うのである。ルターはキリストが設定辞に言われているとおり「真に現在する truly present」という表現を好んで用いる。

ローマ・カトリック教会はキリストのからだと血がそこに現在するとしながらも聖餐を与える賜物について正しく教えていないが、聖餐形式論者はキリス

トのからだは血の現在について正しく教えていない。たとえば聖餐におけるキリストのからだの現在をキリストのからだなる教会に置き換えて理解するカルシュタットの聖餐論についてルターは、「彼は恵みの手段をキリストの苦しみの黙想に変えてしまった。教皇派と同様、彼は聖礼典を人間のわざにしている」と評した⁴。それは聖餐の利益を聖餐そのものと取り違えていることである。しかし聖餐は、キリストを犠牲としてささげるというわざや、キリストの苦しみを黙想するというわざではない。ルターは聖餐を神が私たちに恵みを与える機会と理解する。聖餐は人のわざではない。聖餐は、キリストご自身が制定し、キリスト者が「取って食しなさい」、「みなこの杯から飲みなさい」と言われたパンとぶどう酒と共に食し飲む、イエス・キリストのまことの肉、まことの血なのである。

第二：それはどこにしているのでしょうか。

問：それはどこにしているのでしょうか。

答：聖なる福音書記者マタイ、マルコ、ルカ、そして聖パウロが次のように書いています。「われわれの主イエス・キリストは、渡される夜、パンをとり、感謝してこれをさき、弟子たちに与えて言われた。取って食しなさい。これはあなたがたのために与える私のからだである。私の記念として、これを行いなさい。食事のち同じようにして杯をとり、言われた。みなこの杯から飲みなさい。これは罪のゆるしを得させるようにと、多くの人のために流す、私の血による新しい契約である。飲むたびに、私の記念として、これを行いなさい。」

これが小教理問答の聖餐の第二の問答である。聖餐のおしへのすべては、キリストがこの聖礼典を制定なさった御言葉である設定辞に基づいてなされる。聖餐は人間の工夫による産物ではない。設定辞によって聖別されたパンとぶどう酒において私たちはパンとぶどう酒と共に口でイエス・キリストのからだだと

⁴ Luther Works 40 : 146-148

血をいただく。御言葉がつくりだす信仰によっていただくとき罪の赦しをいただく。

人々は宗教改革の教会においてはじめて実際に理解できることばで聖餐の設定辞を聞いた。それまではローマ・カトリック教会の神父たちは低い小さな声で会衆のきとれないように設定辞を語った。

まず、ルター派の聖餐論は、キリストの設定辞を土台にしていることに注目する。キリストの語られたことであるので理性的にできなくともその通りに受け取る、という態度がそこに見られる。聖餐においてキリストのまことのからだとまことの血をいただくことは、「神の聖なる御言葉である設定辞による真理の唯一で、確かな、動くことのない、疑う余地のない岩の上に基礎をおいており、聖なる福音書記者や使徒たち、その弟子や聴き手によってそう理解され、教えられ、伝達されている」という確信に基づいている。大教理問答の聖餐の箇所で、ルターはこう説教する。「聖餐におけるパンとぶどう酒は日常の食卓で提供されるただのパンとぶどう酒ではなく、神の御言葉に包まれ、御言葉に結び付けられたパンとぶどう酒である。御言葉こそ（と私は言う）、これを聖礼典とならせるものであり、この聖礼典がただのパンとぶどう酒ではなくキリストのからだと血であることを識別させるものである。」⁵ この御言葉は一君侯や一帝王の言葉ではなく、すべての被造物が跪く至高の神のものである。この少しあとでルターは印象的な次のような解説をする。「たとえ十萬の悪魔がすべての狂信者たちを引き連れて『どうしてパンとぶどう酒がキリストのからだと血でありうるのか』と詰め寄っても・・・ここにはキリストの言葉が蔵存する。・・・実際御言葉を取り去り、あるいは御言葉なしでこれを見るならば、手にあるものはただのパンとぶどう酒にすぎない。けれどもパンとぶどう酒があるべき通りに御言葉のもとにとどまるならば、その御言葉の力によって、それは真実のキリストのからだであり、血である。・・・キリストの口が語り話されたその通りになるのである。」

ルターの、キリストの御言葉への信頼は厚い。私たちはパンとぶどう酒がどのようにしてキリストのからだと血でありうるか、理性と一致するか、可能か、

⁵ 大教理問答第五部9以下

などと疑い論じるのではなく、約束をすべて実現する方が語られた単純、明白で疑う余地のない御言葉を、そのまま単純に信じるのである。それは理性的な説明ではなくキリストの設定の言葉の力への全面的な依存と云える。設定辞は全能の主、創造主であり救済主であるイエス・キリストが、最後のときにこの聖礼典の設定にあたって慎重に選んだことばであるから、聖餐は「この世の終わりまで大きな尊敬と服従をもって用いられるのであって、キリストのきびしい苦難と死、およびすべての恵みの働きの変わることはない記憶であり、新しい契約の封印であり、うちひしがれた全ての心の慰めであり、キリスト者をそのかしらと、またキリスト者同志といつもつなぐきずなと結合」なのである⁶。

設定辞という、キリストの言葉に対するルターとツヴィングリの態度の違いがここで明らかになる。ルターにとって、御言葉の内容は、字義に縛られている。外的な御言葉という客観的文字において、それを手段にして聖霊が来たもう。客観的文字を聖霊は手段として用いて働くのである。ツヴィングリの場合には、外的文字には人間の魂を動かす力はなく、聖霊は直接魂に働きかけ、その結果、魂は御言葉の本来の意味を理解できるようになる、とされる。ツヴィングリの聖餐論は彼のもつ一貫した礼典論の一部として理解できるが、それは見える要素とそれが意味することを厳しく区別し、聖霊が手段を用いずに直接人に信仰を与えんとするものである。この場合注意すべき事は、しるしは手段ではなく指示である、という点である。そこでは恵みの手段は神がそれを手段として用いて神の恵みを人に与えるという意味を持たず、むしろ、既に恵みを受けた信者が自分たちは教会に属する者であるということを表すしるしとなる。

ルターは設定辞の意味はその御言葉の字義の中にあると考える。ツヴィングリは文字の字義から理解することよりも、信仰の類比を探す。ツヴィングリにとって霊に影響を与えることができるのは霊のみであった。パンとぶどう酒の肉体的な飲食は決して霊に効果をもたさないのである。更に、よしんば肉体的な飲食というものがあつたとしても、ヨハネ6章63節からみて霊には何の効果もないとする。ツヴィングリは聖餐をその設定辞から説明することはしない。むしろ、キリストのからだを教会として、また、キリストの血をカルバリ山で

⁶ 和協信条根本宣言第七条 44

私たちのために流された血として受け取ることによって教会を「キリストの血の民」として解釈する。そこで聖餐は人々が共に集ってキリストの死を記念することになる。1525年にツヴィングリが書いたドイツ語礼拝式文では聖餐はキリストの苦しみの記念とその死への感謝の式と考えられており、それは個人的なわざに還元されずに、贖われた者の群れである教会の愛餐の機会とされている。式の流れは、最初に人々がキリストのからだとしていわば聖別されており、そして教会堂の身廊に並べられた食卓に着く人々に牧師は後ろから式服を着ないで仕えるというものであった⁷。

次に、聖餐において、受領者は口を通してキリストのからだと血を受け取ることにについて (manducatio oraris) 注目しよう。聖餐におけるキリストの現在はいく想像上のものではない。キリストのからだは信仰によって霊的にのみ食され、口は聖餐においてただパンとぶどう酒のみを受け取られる、というのではない。パンとぶどう酒を外的な食物として食べるとき、遠く離れて存在するキリストのからだとその功績と共に私たちの魂の霊的な食物として受け取られる、ということでもない。聖餐において口が受けるパンとぶどう酒は、信仰が地上の聖餐から身を転じて天上へ昇り、そこで真実にキリストのからだに血にあずかることの保証であり外的なしるしである、ということでもない。口ではなく信仰のみにおいて、遠くにあるキリストのからだにあずかるということでもない。聖餐は主の設定の御言葉と秩序によって成立している。信仰者はキリストの設定辞のゆえに、聖餐のパンとぶどう酒においてキリストのからだと血を受け取る。

聖餐は人間の神聖さによらず、神の御言葉に基づいている。すなわち聖餐は執行者や受領者の邪悪さによって聖餐でなくなることはない。大教理問答を引用すると、「地上のどんな聖者も、否、天上のどんな天使といえども、パンとぶどう酒をキリストのからだに血にすることができないのと同じように、いかなる人間もこの聖礼典を、たとえそれが誤り用いられた場合でさえ、変質させることはできない。聖礼典を成立させ、その制定の基となっている御言葉は、人

⁷ B.A. Gerrish, "Eucharist" in *The Oxford Encyclopedia of the Reformation* (ed. Hans J. Hillerbrand, Oxford Press, 1996) p.72

柄や不信仰のために偽りとなることはない」のである⁸。奉仕者の功績や言葉であれ、陪餐者の飲食や信仰であれ、人間のいかなる言葉も行いも、聖餐におけるキリストのからだと血の真の現在をつくりださない⁹。

聖餐が執行者や受領者によらず、キリストの設定辞によって聖餐であるのであれば、聖別されたパンとぶどう酒がキリストのからだと血であると信じていない者にとっても、依然としてキリストのからだと血なのである。その場合も主のからだと血は受領者に口を通して受け取られる (manducatio impriorum)。不信仰者、悪いキリスト者は、聖餐においてパンとぶどう酒だけを受領しキリストのからだと血を受領するのではない、ということは誤りである。聖餐におけるキリストのからだだけがこ地上に、たとえ見えず、とらえることができなくとも、本来的に現在し、祝福されたパンと共に口で、聖徒たちと共にユダヤや偽善者や見せかけだけのキリスト者によっても受け取られるのである¹⁰。

聖餐において私たちが口によってパンとぶどう酒を食し飲む。聖餐においてパンがからだに、ぶどう酒が血にかわるのではない。聖餐のパンは依然としてパンである。しかし本質のかわっていないパンとぶどう酒を食べ、飲みつつ、しかしなおそこで口によってキリストのまことのからだと血を食べ、飲んでいくということはどのようなことであろうか。

聖餐の設定辞によるパンとぶどう酒とキリストのからだと血の結合は礼典的結合 (unio sacramentalis) と呼ばれている。キリストの受肉においてはキリストの神的本質が人性に変えられるのではなく、ふたつの本性は変えられることなく位格的に結合されている。聖餐における聖礼典的結合は、このようなキリストにおける神人両性の位格的結合ではない。しかしそれは、キリストが神の御言葉によって肉となり、われわれの救いのために肉と血をもとられ、二つの別々の変えられない本性が分かちがたく結合しているように、「これはわたしのからだである」というキリストの契約の御言葉に基づいて、自然のままのパンとキリストの真の、本来のからだだが、聖餐の定められた行為の中で、こ

⁸ 大教理問答第五部 15 以下

⁹ 和協信条根本宣言第七条 73

¹⁰ 和協信条根本宣言第七条 8

の地上のいたるところに、ともどもに存在する、という結合を意味するのである¹¹。

第一コリント書 10 章、11 章では、コリントの会衆における聖餐の乱用、誤用が戒められている。コリントの人々は信仰と愛の両面で罪をおかしていた。信仰の面においては、聖餐において主のからだと血にあずかっていることを愛餐から区別し信じていなかったこと、また、愛の面においては、貧しい人々をかえりみ待ち合わせることをしなかった愛の欠如である。信仰の面では、信じていることに注目すると、そこで言われていることは、主の晩餐にあずかるものすべてにとって、祝福された杯は「キリストの血」にあずかること (koinonia) であり、さかれたパンは「キリストのからだ」にあずかること (koinonia) である。そこでふさわしくなくまま食べ、飲むものは、主のからだをわきまえないで食するということ (μη διακρίνων τὸ σῶμα) であるから、主のからだと血に対して罪を犯すこととされる。すなわち、コリントの人々はふさわしくない方法で主のパン、杯にあずかる者は主の体と血に對する罪をおかすことになり、主の体があることをわきまえず (μη διακρίνων τὸ σῶμα)、主の体と愛餐の区別をせずに飲み食いと主の裁きを身に招くことになるので、自分を確かめるように (δοκιμάζετε ὅτι ἀνθρώπος ἐαυτὸν) 勧められている。

第三：このような飲食が、どんな役に立ちますか。

問い：このような飲食が、どんな役に立ちますか。

答え：それは「これは罪のゆるしを得させるようにと、あなたがたのために与えられ、渡されるのだ」との御言葉に示されています。すなわち、この聖礼典において、この御言葉を通して、われわれに、罪のゆるしと、生命と、祝福とが与えられるのです。それは罪のゆるしのあるところに、生命と祝福があるからです。

¹¹ 和協信条根本宣言第七条 36 以下

これは、ルターの小教理問答の聖餐の第三の問いと答えである。この聖礼典が制定された本来の目的である効力、効用について、すなわち、私たちがこの聖礼典において何を求めるべきか、何を求めるべきかという問いである。ルターは単純に御言葉から答える。「罪のゆるしを得させるように、あなたがたのために与え、渡す私のからだ、血である（マタイ 26 章 28 節、マルコ 14 章 24 節、ルカ 19 章 19 節）」という御言葉である。

大教理問答でルターは、キリストが聖餐を食し飲むように命じられるのは、罪の赦しが私のものとなるために私に定められた賜物として役立つようにというみこころからなのである、と語る¹²。

ルターは聖餐論への反対者は、聖餐においてはキリストのからだだが実際にさかれ血が流されていないのでこの聖礼典において罪のゆるしを得ることはできない、と言うかもしれない。確かに、キリストの救いのみわざは既に十字架の上で成就されているし、そこで私たちの罪の赦しは既に獲得されている。しかし私たちは、罪の赦しが既に成就していることと、それが私たちに与えられているということを説教によって知り、この福音に頼って信仰をもって罪の赦しを受け取るのである。この罪の赦しは御言葉によって聖餐の中に含められ、私たちの前に与えられているのであるから、この宝を聖礼典から引き離してはならないのである¹³。

私たちは日々罪の赦しを必要としている。洗礼によって私たちはまず新たに生まれるが、その新しい人は聖餐によって養われ強められる。キリストによる新生の後、同時に罪人であり義人」なのである。そこに悪魔とこの世からの妨害と攻撃がある。そのような戦いの中で、私たちの信仰がいつも新しい力と生気をくみ取ることができるよう、慰めの聖餐が日ごとの食べ物として与えられている。「信仰が回復し、強められて、このような戦いのさなかにあって転落することなく、ますます強さを加えられるように」聖餐が私たちに与えられている¹⁴。

¹² 大教理問答第五部 20 以下

¹³ 大教理問答第五部 31、32

¹⁴ 大教理問答第五部 23 以下

聖餐の設定辞によると、聖餐は主イエス・キリストの「新しい契約」である。この契約の理解は、ヘブル書 9 章 16 節-17 節にあるような「遺言」の意味といえよう。神は約束を人に与え、その約束が人の信仰の応答を呼び起こす。そして神は約束の御言葉の確信を助けるためノアに虹、アブラハムに割礼などの保証のしるしを与えた。マタイ 26 章 28 節においてキリストは弟子達に罪の赦しを約束され、その御言葉に強力な保証のしるしを与えた。この保証のしるしは、実にそれを伴わなくても救うことのできる約束の御言葉との関係でのみ把握できる。設定辞の御言葉がパンとぶどう酒をキリストのまことのからだと血であるとしているので、罪の赦しの約束を保証するしるしは、キリストのからだと血であって、パンとぶどう酒であったり、それらを食べる、飲むという行為そのものではないのである。

小教理問答に「罪の赦しのあるところに生命と祝福がある」と記されている。生命と祝福は聖餐の結実である。パウロは第一コリント書 11 章 33 節以下で、私の兄弟たち、と呼びかけて、愛餐と聖餐を区別し、愛餐は互いに待ち合わせるようにと勧めている。12 章 12 節以降でひとつのからだが多くの部分によって成り立つと教え、27 節以降であながたがキリストのからだである、一人一人がその部分であると教えるパウロは、一つのからだとなるように洗礼を受け、キリストのからだに血にあずかるようにひとりひとりが聖餐にあずかることを信仰生活の土台として教えている。罪の赦しのあるところに、互いに愛し合うキリストのからだなりのちと祝福がある。

聖餐は主の晩餐であって、人の晩餐ではない。主イエスは、聖餐の執行者であり、またたまたまそのものでもある。そのはき違えには裁きが伴う。主の晩餐は神の具体的赦しを保証し、キリストを頭とする赦しの共同体は終末論的に存続する。聖餐によって私たちがのために死んでみながえられたキリストのまことのからだと血に私たちがあずかり、まさにそのからだである教会のひとつひとつの器官として、赦しといのちを得つつ歩んでいくのである。聖餐における罪の赦しの贈り物が、「主のこられるまで主の死を告げ知らせる」という文脈のなかで受領され、またキリストのからだなる教会の赦し合いの中で具体化されていく。それぞれが赦された者としてキリストにある共同体内の互いを愛し赦していくと共に、その共同体としても神のキリストにおける赦しといのちに基

づく赦しの和と輪をひろげる存在として世界の中で宣教する。そのような営みの中に神はその民に人々を加えてくださる。

第四：肉体的な飲食が、いかにしてそのような、大きな事をすることができのでしょうか。

問い：肉体的な飲食が、いかにしてそのような、大きなことをすることができのでしょうか。

答え：もちろん、それをするのは飲食ではなく、ここに言われているところの、「あなたがたのために与えられ」「罪のゆるしのために流され」との御言葉です。この御言葉は、肉体的な飲食と共に、聖礼典における主要な部分です。そしてこの御言葉を信じる者は、この御言葉が、語り、宣言すること、すなわち、「罪の赦し」を得るのです。

これはルターの小教理問答の聖餐の第四の問いと答えである。聖餐において私たちは肉体的な飲食とともに「あなたがたのために」「罪の赦しのために」という御言葉を信じて「罪の赦し」を得る。

キリストの聖餐の設定辞は比喩的に理解できないことに注目したい。「あなたのために」与えられ、流されたのは、私たちのために死に引き渡されたキリストの真の本質的なからだ、私たちのために十字架の上で罪の赦しのために流されたキリストの本質的な血である。更に、使徒たちは、自分たちに命じられたことを守るようすべての国民に教えるようにと命じられた。

キリストの聖餐の言葉の力は、最初の聖餐のときだけではなく、聖餐のたびに有効である。最初の設定のときに語られた真実で全能の御言葉は、そのときだけ効力を持っていたのではなく、今もその力を保ち、有効で、効果を持ち、強力であるから、聖餐がキリストの設定に従って守られ、その御言葉が用いられるすべての場所において、キリストが最初の聖餐において語られた同じ言葉

の力と能力の故に、キリストのからだは血は真実に現在して分与され、受け取られる¹⁵。

パウロは第1コリント10章16節で「我々が祝福する祝福の杯はキリストの血にあずかること」、「我々がさくパンはキリストのからだにあずかること」と言って、キリストが直接設定された最初の晩餐のときの杯とパンだけでなく、繰り返し返して我々がさき、祝福するパンや杯も真実に、キリストの真のからだに血にあずかることである、と教えている。ここでは、パンにあずかるものがキリストのからだにあずかるとされており、キリストのからだを霊的に受けることではなく、聖礼典として受け取ることになる。

和協信条根本宣言では、キリストがこの設定辞を食卓で晩餐の際に語られたという文脈を重視し、自然のパンとぶどう酒について、それも口をもつての飲食について語っていることは自明であるとする¹⁶。そこにはキリストのからだか霊的なパンであるとか魂の霊的な糧であるというような、パンの意味を変える隠喩の可能性はない。

私たちの御言葉への態度と信仰の態度は密接に結ばれている。私たちが御言葉にどう向き合うかが、私たちの信仰のあり方そのものなのである。御言葉を約束であり賜物として受け取るにのみ、私たちの信仰は神が御言葉において約束されたことを信頼する信仰となり得る。御言葉を神の御旨の表記として受け取るとき、信仰は洞察や知識となり、そこで御言葉が理論化される。御言葉が神の訴えの叙述として受け取るとき、信仰は行動や理論や概念に表された具体的表現となり、そこで御言葉は道徳化される。御言葉を神の御旨の表現として受け取るとき、信仰は人間の生活というものの基本的な部分や経験となり、御言葉は心理学化される。御言葉が約束であり賜物であるときのみ、信仰はほんとうに信仰となり得るのである。

聖餐論におけるルターの現在論は、言語学的意味合いでの「サイン」ないし「象徴」がそれによってあらわされていることがらそのものであること、すなわち「言葉」はそこないものでなくそこに実際に存在するものを代表してい

¹⁵ 和協信条根本宣言第七条74

¹⁶ 和協信条根本宣言第七条48

るという、宗教改革的な解釈学的発見に基づいたものである。1518年に、贖宥状をめぐる議論の中で悔悛と赦しの宣言について繰り返し考察している内に見出した。赦しの宣言のことばである「私はあなたの罪を、父と子と聖霊の御名によって赦します」ということばは、表記でも、叙述でも、表現でもなく、御名によって語った人と、その語りかけを聴いた人との間に、信じるか信じないかという実際の関係を作り出す言語行為のかたちをもった「約束」なのである。

聖餐はキリストが「これはわたしのからだである」と言われた約束であり、私たちはそれをその通り、言葉で言われているように信頼して受け取るのである。

パンとキリストのからだは本来ふたつの区別された性質を持つ別々のものがあり、別々に指示されたときには、それぞれ互いに異なったものである。しかし、「これはわたしのからだである」とキリストが聖餐を設定して言われたとき、その新しい結合によって、その結合を言う限りにおいては、そのどちらかが本質を失うのではなく、パンとキリストのからだの本質はそれぞれそこにありながら、パンとキリストのからの区別を失う。パンとキリストのからの区別が混ざり合うのではない。また、魔術的にパンにキリストのからだから降りてくるものでもないのである。このような礼典的結合において、キリストが「これは」と言われたのはパンであり他のパンとは本質において変わりはないが、それは「わたしのからだ」と言われたキリストの真のからだと「からだパン」とも言えるひとつのユニットであり、聖礼典的な実体なのである。杯にあるぶどう酒をさして「これはわたしの血である」と言われたことも同じである。

不完全な例ではあるが、私たちは提喻（シネクダキ）において、水のはいたりグラスをさして「これは水です」と言う。水とグラスは一体になっている。それらが別々のときには混同されることはないが、ひとつのユニットにされるときひとつとして語られる。どちらかが失われることなく、パンをさしてわたしの体、と言い、ぶどう酒のはいたり杯をさしてこれはわたしの血と言われた。

このような飲食を私たちは理性で明確に説明することは不可能である。むしろ、聖書の、そしてキリストの設定辞という御言葉に優先させて受け取っていくのである。真のキリストのからだと血を飲食するからといって、人間の飲食のような「カペナウムの」飲食ではなく、自然を超えたはかりがたい飲食なのである。

キリストの位格的合一とは、キリストの神性と人性は区別されるが分離されるのではないという意味である。和協信条根本宣言第七条で、聖餐におけるキリストの真の現在を語るときにキリストの人性と神性を分離して、人性は天にあり、聖餐においては神性に従ってのみの現在の現在と理解すると言う立場が斥けられている。キリストのからだは血は、霊的に信仰によって受け取るのであって、身体的に口をもってこれを受け取ると言うことではない、というような改革派の聖書理解を、比喩的なものであると批評する。すなわち、「食べよ」を「信じよ」の譬喩とし、「である」を「しめされている」と「意味しているもの」を分離して解釈しているという問題を指摘しているのである。

もしも、すべての聖餐の場面でキリストのからだと血が文字通り真に現在する、ということであるならば、キリストのからだは世界をつつむほど空間的にひろい偏在性をもつことになり、ばかげている、という批判も成り立つであろう。また、昇天されたキリストは神の右の座にあり、聖餐において現在するならば天の座から引き下ろすことになる、という空間的な批判も成り立つであろう。しかし、神の右の座は座標のある場所のことを意味するのであろうか。天は距離的に非常に離れた場所にあるのであろうか。神は偏在し、キリストがその右の座で天と地の一切の権威をあずかっておられるなら、キリストも偏在である。さらに、キリストは神性にあって偏在であるなら、位格的合一においてキリストのおられるところに人性も存在するという説明も成り立つのではないか。神性と人性を区別されるが分離されないキリストが、聖餐に現在することは全く不可能なことであらうか。ルーテル教会では天国を場所とせず、むしろ、聖餐において「あなたのために」キリストが現在すると信じ、キリストのからだに血にあずかるのである。

キリストが設定された聖餐の飲食において、パンとぶどう酒という肉体的な飲食とともに「あなたがたのために与えられ」「罪のゆるしのために流され」という御言葉が示すとおり、私たちはキリストの真のからだに血にあずかり、約束された「わたしのため pro me」の罪の赦しを得るのである。

第五：どのような人が、この聖礼典にあずかるにふさわしいのですか。

問い：どのような人が、この聖礼典にあずかるにふさわしいのですか。

答え：断食や、肉体的準備をすることは、たしかに外面的にはよい訓練です。

しかし「これは罪のゆるしを得させるようにと、あなたがたのためにあたえられ、流されるのだ」との御言葉を、信じる者こそ、まさしく、ふさわしく、適している人です。しかし、この御言葉を信じず、疑う者は、ふさわしくなく、適していない者です。それは「あなたがたのために」との御言葉は、純粋に信じる心を要求するからです。

以上が、ルターの小教理問答の聖餐の箇所における最後の、第五の質問と答えである。ex opere operato という事効的な聖餐理解ではなく、神の与える賜物を、私たちが信仰をもって受け取ることの重要性が述べられているとも言えよう。

聖餐にふさわしい者、ふさわしくない者については、和協信条根本宣言においても言及されている。聖餐にふさわしくない者とは、「自分の罪についての真の痛悔と悲嘆なしに、また、真の信仰と、自らの生を改めようとのよい意図なしに、この聖礼典に来る人」である。彼らは「一時的な罰と永遠の罰を招き、キリストのからだを血を汚す者」である¹⁷。

これとは逆に、聖餐にふさわしい人はどんな人なのであろうか。それは、「自分の罪の大きさと量とにここから恐れをなし、これほどにひどいけがれの中にあってはキリストの高貴な宝と恵みにふさわしくなくない」と思い、自らの信仰の弱さを認めて、これを嘆き、強い、喜ばしい信仰と純粋な服従をもって神に仕えることを心から願う、弱い信仰の、臆病な、悲嘆にくれたキリスト者こそが、真の、ふさわしい客なのであって、このいとも聖なる礼典はすぐれてこのような人のために設定され、定められているのである。」和協信条根本宣言ではこの

¹⁷ 和協信条根本宣言第七条 68

あと、マタイ 11 章 28 節、マタイ 9 章 12 節、第二コリント 12 章 9 節などを引用する¹⁸。

大教理問答は、いかなる人が聖餐の力と益とを受けるのか、について、きわめて簡単明瞭に説教している。「すなわちそれを受けるのは、みことばのままを信じ、みことばのもたらすものを信じるその人である。このみことばは石や木にではなく、みことばを聞く人々に語られ、または宣べ伝えられるのである。その人々にキリストは『取って食しなさい』と言われるのである。そして、キリストは罪のゆるしを提供し、約束されているのであるから、信仰による以外の方法ではそれを受け取ることはできない。』¹⁹ 御言葉を受け入れて信じる人が所有し、信じていない人は何も所有できない。

先に第一コリント 10 章、11 章の箇所から見たように、そこでふさわしくないまま食べ、飲むことは、そこにキリストの真のからだがあることをわきまえないで食すということ (μη διασπῖνον τὸ σῶμα) である。和協信条根本宣言はこのような者は、パンとぶどう酒のみに対して、つまり、からだと血のしるし、象徴に対して罪を犯すのではなく、主イエス・キリストの「からだ」と血を犯すのである」と言われていて、ここにおられるキリストを侮辱し、誤用し、冒瀆しているのであって、行動をもってキリストのからだに実際につかみかかり殺してしまった人たちと同じである、と厳しい²⁰。

和協信条根本宣言は更にキリストの肉を食する二通りのしかたを紹介する。ひとつは霊的に食することであり、今ひとつは口をもって食べる食べ方である²¹。第一の霊的に食することについてキリストはヨハネ 6 章 48 節から 58 節においてすばらしい仕方を取り扱っておられる、とする。これは、「福音の説教と考察においても聖餐においても、霊と信仰とをもってする以外には起こらず、それ自体として有効で、効力があり、あらゆる時代のすべてのキリスト者の救いにとって欠くべからざるものである。……このように霊的に食することは、信仰にほかならない。すなわち、キリストが、われわれのために死に引き渡したご

¹⁸ 和協信条根本宣言第七条 70

¹⁹ 大教理問答第五部 33-34

²⁰ 和協信条根本宣言第七条 60

²¹ 和協信条根本宣言第七条 61-66

自身の肉と、われわれのために流した彼の血をもつてわれわれのために獲得なさったすべての恵みのわざ、恵みと罪のゆるしと義と永遠のいのちとともども真の神であって人である方としてわれわれに示される神の言葉を聞き、信仰をもって受け入れ、自分自身のものとし、この主イエス・キリストのゆえに、恵みの神と永遠の救いを持つという慰めに、たしかな確信と信頼とをもって固く身をゆだね、これを、いかなる困窮と試練においても保ち続けることである。」信仰は、キリストの御言葉を聞き、受け入れ、自分のものとし、約束に身をゆだね、保ち続けることである。

第二の食べ方は口をもって食べる食べ方である。和協信条根本宣言の引用をする。「キリストのからだのいまひとつの食べ方は口をもって、あるいは礼典的に食することである。すなわち、聖餐においてはキリストの真の、本来のからだとは、聖餐の祝福されたパンとぶどう酒を食し、飲むすべての人により口を持って受け取られ、食される。それは信仰者にとっては、その罪が確かに赦され、キリストが彼らの内に住んで、力強く働かれることのたしかな担保と保証となるし、不信仰者にとってはさばきと滅びとなる。」

これらの二つの食べ方の解説によると、ルターも霊的な面を重要視していたことがわかる。「霊的」というこの言葉は聖餐形式論者にとっては正しい信仰の者が信仰を通して霊においてキリストとひとつのからだだとされ、真実の霊的な肢体となることを意味するのである。しかし、ルターにおいては、私たちの持たなければならぬ正しい信仰が先んずるのではなく、私たちの理解を超えたあり方ではあるが、設定辞にあるように聖餐に現在するキリストの事実がある。現在するキリストは聖餐において信仰者の内に慰めといのちをもたらし。そして不信仰者にはさばきをもたらし。「これを行え」と言われるキリストの御言葉によって、そのとき聞き手の信仰が呼び覚まされ、強められ、たしかとされる。口を通して起こる具体的なキリストのからだとは血の飲食が、あらゆる試練の中で私たちの信仰を強める。安心して、確かにこれに依拠し、ゆだねることができるからである。

私たちは聖餐において、キリストの設定辞の御言葉の通りキリストのまことの中から血を口でいただく。私たちの信仰が聖餐を聖餐たらしめるのではなく、それは御言葉の約束による。私たちはその御言葉の約束によって石や木の

ようにではなく信仰が呼び起こされ、御言葉の約束の通りに信頼し約束された賜物を確かにいただく。そこに信仰の励ましがある。悪魔と世と肉の力によって常に戦いをいどまれている私たちは、聖餐においてご自分をお与えくださるキリストの約束に堅く信頼し、すべての罪を赦された確信を持って、恵みと平安の内に与えられた生命を祝福されて終末論的に生き生きと生きていくのである。

終わりに

聖餐は「主の晩餐」である。聖餐からキリストを閉め出すことは避けなければならない。いや、キリストが聖餐に私たちを招いておられるのである。これに人間の交わりや、人間の感謝のときとするのではなく、キリストが罪の赦しを私たちに確かに与えるために設定された恵みの手段として大切にしたい。キリストが設定された救いの確信を離れて、それにかわるものを懸命に自分なりにつくろうとしてはならない。アダムは、これから食べてはならない、という神が定めた律法を破り人類に罪をもたらしした。第二のアダムとしてキリストは救いを完成し、その罪の赦しを私たちに恵みのうちに与えてくださる。「わたしのからだ、わたしの血」を「あなたがたのために」「罪の赦しのために」とお与えくださり、これを食べなさい、と言われるのである。聖餐は教会にとってあってもなくてもよいものではない。必要であり有益であるキリストご自身という賜物をキリストが私たちに与えてくださるために聖餐を設定してくださった。私たちは聖餐をたべることでのちを得るのである。

聖書の御言葉が私たちにかくも行き届いた慰めと励ましを与えているのである。これを奪う者に対して愛をもって真理を語りつつ、共に主の恵みにあずかるものとして育てていきたい。

(神戸ルーテル神学校校長)